

新生児期における母子保健地域ケアに関する研究

遠藤 昌一*, 浅岡 健**, 吉田 浩一***
寺内 幸子***, 大貫 八千代*, 寺内 ミチ子*
渡辺 恵美*, 若林 洋子****, 岡ノ谷 フク*****

要約 近年、医療の進歩により乳児死亡率は激減し、生命に関するような疾患はごく少なくなったが、核家族化やその他家族関係の変化のため、実際に育児の問題に面した場合に家族からの援助が受けられない場合が多く、また地域からの援助も未発達のため、種々情報メディアによる育児知識の普及にもかかわらず、乳房トラブル、育児不安などの諸問題は以前よりも多く、これらの問題解決への地域からの支援にたいする要請は高い。従来、保健所の一事業として新生児訪問を地域在住の助産婦に委託して行ってきた。これら助産婦の高齢化に伴い、種々の問題が浮き上がってきたので、広く地域の社会資源を活用することにより、より質の高い、地域のニーズにそくしたケアを提供できるシステムを研究した。

見出し語 新生児訪問 母子保健地域ケア 助産婦の訪問

研究方法

地域における新生児期の母子保健上の問題の解明には、地域内の母子保健にたずさわる産科医・小児科医・病院産科の婦長・市保健センターの保健婦・新生児訪問担当助産婦・保健所医師・保健婦・事務担当職員の討論によった。

地域における母子保健ケアの向上については、上記の討論により、地域資源の活用による従来の助産婦の訪問を支援するシステムの確立および担当助産婦の研修によることにした。

結果

母子保健上の問題点

足利保健所においては地域の助産婦9名に委託して、新生児期に2回の訪問を行っている。実績は年間出生1700に対して約700人延べ1400件にのぼる。

これらの助産婦の報告によると殆どの母親が

育児上または産褥上の何らかの問題を抱え、訪問を歓迎している。

問題としては授乳に関するものが最も多く、重いものは乳腺炎までに至る。次には悪露に関するもの、育児に関する不安、精神的なメラソリーなどである。これらの問題を解決するため、従来は家族の援助が得られていたが、近年、核家族が多く、家族からの援助を得ることが難しくなっている。

また、種々の情報メディアによる育児知識の普及と母親の自我の成長のためか、家族があっても年長者との間に育児方法に意見のくい違いが見られ、訪問助産婦はこの調停にも重大な役割をはたしている。

足利赤十字病院産科においても、自分のところでお産をした母子を対象に相談サービスを行っている。相談を依頼する頻度は約70%にも

* 栃木県足利保健所 ** 市内産科医 *** 市内小児科医 **** 足利赤十字病院
***** 足利市保健センター ***** 市内助産婦

上っており、新生児期の母子保健ケアに対する要望はかなり高いものと考えられる。問題の内容も前述の保健所新生児訪問の場合に見られるものとはほぼ同様で、乳房管理に関するもの、悪露、育児不安、メランコリーなどである。
ケアサービス提供の現状

1) 保健所新生児訪問の現状は前述のように年間出生1700弱に対して約700人の訪問をおこなっている。手続きとしては、助産婦が市からもらった出生者名簿によっておこなっている。この方法について現在までは問題がなかったが、今後市にある情報をこのように流用することに問題が生ずる恐れがあり、現に県内の或る市町村で既に問題にされている。今後は母子手帳に挿入されている葉書による依頼によってのみ訪問を行うべきである。

2) 市保健センターでは、出産および育児準備のための母親学級を行っている。年間新しい学級として4クラス作り、1クラス約90人年間360人もの母親が4回の講習を受けている。また出産後のクラスも設けてある。この受講者は市内の産院の母親学級にも通っている人が多く、両者を受講することによりさらに知識を深めるといふ。

3) 足利赤十字病院の産科では産前の母親学級の他に、出産退院後いつでも相談に応ずるサービスを行っている。利用者は前述のように退院者の70%にも及ぶ。電話による相談もあり利用者に喜ばれている。現在困っていることは乳房マッサージをしてくれる人が少ないことである。

4) 市内の産院 殆どの産院が出産準備の母親学級を行っている。浅岡医院ではビデオを利用して効果をあげている。また松田道雄の育児百科を教科書として利用している。

保健所新生児期母子保健ケアサービス—今後の方針

これらのサービスを見ると、それぞれ特徴があり、また利用者の利用の仕方も異なる。担当者が交流を行い、他の特徴を学べば、サービ

スの質をさらに上げることができることと考えられる。

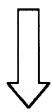
具体的には、まず保健所私生児訪問担当助産婦が市保健センターの母親学級を見学する。次に、足利赤十字病院産科は新生児期母子保健ケアの経験および知識の蓄積があるので、これから担当者と一緒に研修会を開く。

どのサービスからの観察でも乳房管理上の問題が大きい。これには予防対策が重要と考えられ、母親学級で重点的に教えているが、母親は実際に自分が問題に遭遇しないと重要性を感じなく、覚えようとしなない。やはり乳房管理は新生児期ケアの中心にならざるをえない。

保健所の新生児訪問は来年度から母子手帳に挿入してある葉書による依頼によるもののみとする。このため必要を感じた人のみを訪問することとなり、より効率的になるが、一方ではこのサービスのあることを母親に周知させないと必要のある人をミスすることになる。そこで、市内の産科医に産科医会および医師会をつうじて母親にこのサービスを利用することをすすめてもらう。また、母子手帳にある葉書に保健所の宛名を印刷しておく、葉書にあるアンケートの内容を簡単にする、郵送を料金受取人払にするなどして依頼しやすくする。

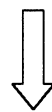
結論

1. 新生児期母子保健ケアに対する要望はかなり大きい。
2. 保健所新生児訪問事業をさらに充実させる必要があり、まず依頼のあったもののみ訪問する。また依頼し易くする。
3. 地域内の母子保健サービス実施機関との連携を深め、意見の交換や研修などを通じてこのサービスの質を高める。
4. 今後、乳房トラブル予防・乳房管理の効果的な方法を研究する。またこの事業全体の評価を続けていく。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 近年,医療の進歩により乳児死亡率は激減し,生命に関するような疾患はごく少なくなったが,核家族化やその他家族関係の変化のため,実際に育児の問題に面した場合に家族からの援助が受けられない場合が多く,また地域からの援助も未発達のため,程々情報メディアによる育児知識の普及にもかかわらず,乳房トラブル,育児不安などの諸問題は以前よりも多く,これらの問題解決への地域からの支援にたいする要請は高い.従来,保健所の一事業として新生児訪問を地域在住の助産婦に委託して行ってきた.これら助産婦の高齢化に伴い,種々の問題が浮き上がってきたので,広く地域の社会資源を活用することにより,より質の高い,地域のニーズにそくしたケアを提供できるシステムを研究した。